

ちよっぴりえっちな美
少女アヴェュールとまじ
めなモンジャラのレ
ポート

木村直輝

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

くアヴェユールとモンジャラのジョウト旅行く

【あらすじ】

ちよつぴりえつちな美少女アヴェユールとまじめなモンジャラが、二泊三日のジョウト旅行に！

アサギシティ近くのモーモー牧場で乳搾り体験をしたり、エンジュシティでスズの塔を眺めたり、夜の自然公園で切なくなったり……。

目次

1日目	お昼	アサギシテイ	1
1日目	午後	39ばんどうろ	9
1日目	夜	コガネシテイ	13
2日目	午前中	キキヨウシテイ	25
2日目	昼下がり	エンジュシテイ	31
2日目	夕方	エンジュシテイ	36
2日目	深夜	しぜんこうえん	40
3日目	朝	コガネシテイ	46
3日目	午前中	しぜんこうえん	49
3日目	夜	41ばんすいどう？	62

1日目_お昼_アサギシティ

——ここは アサギ シティ

とおく はなれた いこくに

もつとも ちかい みなとまち——

「うくん……い！」

ポケモンセンターから出てきた一人の若い女性が、日差しを浴びてひかえめなのびをする。

二十歳前後だろうか、とてもかわいらしい顔立ちをしている。

ダークブラウンのつややかな髪を低い位置で二つに結んだ彼女の名はアヴェユール。

ピタツとしたタートルネックの赤いシャツに白いショート丈のジャケットを羽織り、

黄色と黒のショートパンツを合わせている。

「……」

そんなアヴェユールのうしろには、一匹のポケモンがいた。

「モンジャラ、お腹空いたね」

「もじゃー」

“ツルじようポケモン”モンジャラ。

アヴユールとモンジャラはこのジョウト地方に、つい先ほど船でやってきたばかりだった。

遠い地方からやってきたアヴユールたちは、まずポケモンセンターを訪れ、荷物を預けるなどして観光をするための支度を整えていたのである。

「じゃあ、予定通り、まずはご飯食べに行こう！」

「もじゃー」

アヴユールはモンジャラの返事を聞くと、首から下げていた小型の電子端末をつける。アヴユールの住む地方で普及している、便利な携帯用の電子端末だ。

「お店は……えーつと……あっち……かな」

「もじゃつ」

歩き出すアヴユールについて、モンジャラも歩き出す。

「ジョウト最初のご飯はねえ……、何だと思う？」

「もじゃあ？」

「なんと、洋食です！」

「もじゃつ」

「港町だから海の幸かなあ〜って思ったんだけど、港町と言えばもう一つ！ 洋食が熱

「いんですー！」

「もじゃー」

「ほら、港町って色んな国の文化が入ってくるでしょ？ だから、洋食屋さんもいっぱいあるみたいなの」

「もじゃあ……」

「それに、アサギは牛肉が有名じゃない？ ということで……」

「……」

「まずは、ビーフシチューを食べに行きたいと思います！」

「もじゃー！」

「って言っても、アサギ牛は流石に高いから、普通の牛肉なんだけどね……」

「もじゃあ〜」

アヴユールとモンジャラは楽しそうに話しながら、港町を歩いていく。

遠くには先ほどまでアヴユールたちが乗っていた大きな客船が停泊しており、他にも何隻かの大型船舶が見える。そして、東の方にはひとときわ目立つ大きな塔が立っていた。

「ねえ、モンジャラ。あれ見て！」

「もじゃっ？」

「アサギのとうだい」だよ？　すごいねー。おつきー！」

「もじゃー……」

アサギシティの南東には、アサギのランドマークとも言える高い灯台が立っている。別名、*かがやきのとう*。

「アサギシティではね、昔からポケモンが夜の海を照らしてたんだって。それを祀^{まつ}って出来たのがあの灯台らしいよ？」

「もじゃー」

「今でもあの塔の上にはポケモンがいて、海を照らしてるんだって。すごいねー！」

「もじゃー！」

「ご飯食べ終わったら、一緒に写真撮ろう！」

「もじゃっ！」

アヴユールたちは灯台から視線を戻し、海から離れて街の奥へと入っていく。

「この辺は意外と都会、って感じだね？」

「もじゃー」

「えーつと、お店は……あっちの方かな」

「……」

「あつ、ねえ。ビーフシチューの後は、ちよつと海を見ながら休憩しない？」

「もじゃー」

「洋食の後は、ケーキがいいかなあって。えっと、待ってね……。ほら、これ！」

周囲を確認してから、道の端でかがんで電子端末の画面をモンジャラに見せるアヴュール。手の中の画面には、断面が整えられていないふわふわのスポンジに、赤いイチゴと白いパウダーシュガーが乗ったかわいらしいケーキが映っている。

「これ！ シンプルだけど、美味しそうでしょ」

「もじゃー！」

「このケーキを買って、〃アサギのとうだい〃の写真を撮って、そのあと海を見ながらちよつとだけ休憩しよつか？」

「もじゃー」

「その前に、まずはお昼ご飯だね」

楽しそうにお喋りしながらしばらく街中まちなかを歩いたアヴュールたちは、ついに目的の洋食屋さんに辿り着く。

「ここだ！ 意外と小さいお店だね。カフェみたい」

「もじゃー」

「ちよつと席、空きそうだよ。先、入っちゃおつか」

「もじゃっ」

会計を終えた先客と入れ違うようにお店に入ったアヴユールたちは、間もなくカウンター席に通される。少し薄暗い店内が、落ち着いた雰囲気かきを醸し出している。

ランチメニューもやっていたが、アヴユールは最初から決めていたお店の定番メニューである「ビーフシチュー」を注文した。

「このお店の先代さんは、船乗りでコックさんだったんだって」

「もじゃー……」

「その先代さんのソースを受け継いだ、歴史のあるドウミグラスソースがこのお店の売りらしいの」

「もじゃー」

「楽しみだねっ」

「もじゃー……」

期待に胸を膨らませながら楽しく談笑するアヴユールたちの前では、店主が慣れた手つきで料理を用意する。それを手伝うのは奥さんたちだろうか、それとも熟練のスタッフだろうか。間もなくアヴユールとモンジャラの前に、サラダとライス、そして平たい皿に盛られたビーフシチューが運ばれてくる。

「わ……、美味しそー！」

白い湯気上げるビーフシチューは、スープ皿ではなく平たいお皿に盛られている。

ステーキのように真ん中に盛られた牛ほほ肉の上に、たつぷりのブラウンスソースのうなシチューがかかかっており、その周りをマツシユポテトで作った土手が囲んでいる。

「いただきますー！」

「もじゃー！」

手早く写真撮影を済ませると、さつそく、まずは普通にビーフを一口ほおぼるアヴュール。

「ん……」

ほろ苦い風味が口に広がる。塩気の強い濃厚なドウミグラスシチューが、ナイフで切るのも難しいほど、ほろほろとした肉を包みこんでいる大人な味だ。

次は、海の波のようにうねったマツシユポテトの土手を一口食べてみる。

「んー……」

ほのかな塩気となめらかな口触りのポテトがクリーミーで、口にした時はねじれていったポテトが口の中でほどけていく。

「……モンジャラ。ナイフ、ちゃんと使えてる？」

「もじゃっ！」

ツルで器用にナイフとフォークを繰るモンジャラを、アヴュールは笑顔で見つめる。

「じゃあ、塗ってみようか？」

「もじゃー!」

アヴユールたちは、今度はナイフにポテトを取ると、それを一口大に切った牛肉にバターのように塗ってから口に運んだ。これがこの店のおすすめの食べ方なんだそうだ。

「……………んー! 美味しい……………」

少し塩気の強いシチューとなめらかな口触りのクリーミーなポテトが混ざり合うことで、口の中で絶妙な味のバランスが完成する。ほろほろとした肉の旨味を逃さないように噛みしめ噛みしめ、アヴユールは飲み込む。

「ふう……………」

アヴユールは隣を見る。小さな体で懸命にナイフとフォークを使い、おんなじ料理を食べるモンジャラがいる。

「……………もじゃあ?」

「ふふ。美味しいね」

「もじゃー!」

うれしそうに返事をするモンジャラに、アヴユールは優しく微笑む。

昼時のアサギシテイで、一人と一匹は、海のようなしお気を感じながら穏やかな昼食を楽しんだ。

1日目 | 午後 | 39ばんどうろ

——モーモー ぼくじょう

うまい しぼりたてミルクを どうぞ！——

「モンジャラ、面白かったね！」

「もじゃー！」

お昼ご飯を食べ終えたアヴユールとモンジャラは、アサギシティから北に伸びる “39ばんどうろ” の “モーモーぼくじょう” を訪れていた。

「正直最初はちよつと怖かったけど、お姉さんもミルクタンクも優しかったね」

「もじゃあ」

アヴユールとモンジャラはこの “モーモーぼくじょう” で、乳搾り体験を楽しんだところだった。

「でも、モンジャラにお乳しぼられて、ミルクタンク。ちよつとくすぐったそうだったよね」

「もじゃ……」

モンジャラの表情がびたつと止まる。つい今し方の出来事を思い出して、よみがえつ

てきた申し訳なきに大人しくなる。

モンジャラの全身をおおうブルーのツルには細かな毛が生えているため、ツルで触られるとくすぐつたいのだ。

「ふふ、モンジャラつたら」

「もじゃあ……」

「ねーえ、モンジャラ」

「もじゃ?」

「ミルタンクのおっぱいさあ。あつたかくて、ピンク色の、綺麗なおっぱい。血管が浮き出でて、ぎゅって握ると真っ白なお乳がびゅーって出て……」

アヴユールはそう言いながらしやがみこむと、モンジャラの側面に顔をよせ、ささやいた。

「ちよつとえつちだつたね」

「もじゃっ!」

びくつとするモンジャラから顔を離し、アヴユールは笑う。

「ふふふ。モンジャラ、動揺しすぎ。ふふ、ふふふふふ」

「もじゃ、もじゃ……、もじゃっ!」

突然アヴユールに抱きかかえられ、モンジャラは驚いて鳴き声を上げる。

そんなモンジャラをアヴユールは胸にぎゅーっと押しつけるように抱きしめると、いたずらっぽい笑みを浮かべて歩き出した。

その口元を、モンジャラに近づけて、小さな声でささやきながら――。

「ねーえ。モンジャラは、思わなかったの?」

「……………もっ、もじやつ」

「なんで? だって、おっぱいだよ? ミルタンクの、女の子の、おっぱい……………」

「もっ、もじやつ! もじやつ!」

モンジャラは否定するように、強い鳴き声を出す。

「ふーん……………。じゃあ、これは?」

そう言うと、アヴユールは自分の懐つつましやかな二つのふくらみをモンジャラにこすりつけるように、ゆっくりモンジャラを動かした。

「もじやつ! もじやつ!」

「んー? どうしたのー? だって、モンジャラはおっぱい。別にえっちだと思わないんでしょー? そうだよねー? だってモンジャラ、植物だもんねー?」

「もじやつ! もじやつもじやつ!」

「ふふ、ふふふふふ。……………はあ。……………んっ、おしまい」

そう言うと、アヴユールはモンジャラを地面におろした。

「じゃあ、ソフトクリーム食べに行こう？　しぼりたてモーモーミルク百パーセントのソフトクリーム。とつても濃厚で美味しいんだって」

「……………」

「モンジャラ？」

モンジャラは、アヴユールに背を向けたまま返事をしない。

「……………もしかして、怒ってる？」

「もじゃっ！」

否定するように鳴いたモンジャラの声は、ちよつと語気が強かった。

「もく、ごめんね。続きは今晚ゆっくりしてあげるから。だから、今はせつかくだし。

ソフトクリーム食べよう？」

「もじゃ!?　もじゃ!　もじゃ!」

突然、だーつとモンジャラが走りだす。

「待ってモンジャラ。別に逃げなくても今はしないから。ふふ。もう、モンジャラー！」

モンジャラを追って、アヴユールも走りだす。

二人が走る牧場の青い空には、モーモーミルクみたいに真つ白な雲が大きく広がっていた。

1日目 夜 コガネシテイ

——ここは コガネ シテイ

ごうか けんらん

きんぴか にぎやか はなやかな まち——

「まだお腹、大丈夫？」

「もじゃ」

「うん。コガネに来たからには、たこ焼きは外せないけど、串カツも食べたいもんね……」

アヴユールとモンジャラは、人で賑わう夜の繁華街を歩いていた。

「たこ焼きは二人で食べたらあつという間だったし、串カツいっぱい食べれそう」

「もじゃー」

「ふふ。……たこ焼き。本当に、外はカリッとしてるのに中はとろ～つてしてて、美味しかったねえ」

「もじゃー……」

「ていうか、たこ大きくなかった？」

「もじゃ」

「あんなたこのおつきいたこ焼き初めて食べたかも」

「もじゃ〜」

「また食べたいね」

「もじゃーっ」

アヴユールは時おり電子端末の画面で道を確認しながら、モンジャラと楽しそうに歩いていく。

「にしても、ギリギリお店開いてる時間に間に合ってよかったね」

「もじゃー」

アサギシティとコガネシティは直線距離だとそう遠くないが、地上を行くと一度北上してからエンジュシティを経由して南下しなくてはならないので、相当な距離がある。

本来ならばとてもではないが一日で両方とも観光することは難しいのだが、アヴユールはハードスケジュールを組んで、ホテルをとつてあるこのコガネで夕飯を食べることにしたのである。

「今日はいっぱい歩いたし、よく寝られそー」

「もじゃ〜……」

「明日も早いし、ホテルついたらお風呂入ってすぐ寝たいけど……」
「もじやつ？」

言葉を止めてモンジャラをじつと見つめるアヴェүүлを、不思議そうな顔でモンジャラが見上げる。

「……約束しちゃったもんね。続きは、今晚するって……」

「……もじやつ！ もじやつ、もじやつ！」

モーモー牧場での出来事を思い出し、モンジャラは慌てて大きな声で鳴く。

「ふふふ。もう、モンジャラだったら。ふふふ、ふふふふふふふ」

「もじやつ！」

「じゃあ、今日はやめておく？」

「もじやつ！ もじやもじやつ！」

「そんなこと言ってー、我慢できるの〜？」

「もじやつ！ もじやつ！」

「でもー、私が我慢できないかも」

「もじやつ……」

「……ふふ。ふふふふふ」

動揺するモンジャラを見て可笑しおかそうに笑うアヴェүүлは、急に目の前で誰かに立ち

止まられて足を止めた。

「ねえ、お姉さん。一人でしょ。よかつたらさ、俺らと一緒にご飯行かない？ おごるよ？」

アヴユールの前には、三人の若い男が立っていた。

「ごめんなさい」

アヴユールはそれだけ言うと、足早にその場を去ろうとする。

しかし、三人はアヴユールの行く手を囲うように塞いで立ちほだかる。

「いーじゃん。俺らこー見えてけっこうお金持つてるよ？」

「お姉さんお洒落だねー。そのシヨーパンとかちよー似合ってんじゃん」

「馬鹿、ヨウスケ。ごめんねー。こいつはちよつとチャライけど、俺らはそういうんじゃないから。あつ、俺ケンタね。よろしく」

「……あの、私モンジヤラがいるんで」

そう言つて強引に脇を抜けようとするアヴユールの前に、男たちはしつこく出てくる。

「いや、モンジヤラつて」

「いいよいよ。モンジヤラも一緒にご飯食べよう。おごつてあげるからさ」

「……あの。本当にごめんなさい」

「ちよつと待つてよー」

「うわあ、いてー！」

「もじやつー！」

男の一人がわざとらしくモンジヤラにつまづき、蹴飛ばした。

「ちよつと！ やめて下さい。——モンジヤラ、大丈夫！」

アヴユールがモンジヤラを抱きかかえる。

「ごめんごめん。小さくて気づかなかつたよ」

そう言う男の後ろで、ずっと静観していた男がポケットからゴージャスボールを取り出しポケモンを出した。

「りいきーー！」

外に出た「かいりきポケモン」のゴーリキーが雄叫びを上げるように鳴き、通行人が迷惑そうにそれを避けて通り過ぎていく。

「出た、リュウジさんのゴーリキーー！」

「俺のゴーリキー、なんで進化させてないかわかる？ ポケモンって、進化させた方が強くなるけど、進化させない方が成長は早いのだから、あえてゴーリキーまでは進化させて、止めてるわけ。ま、進化しないモンジヤラ使ってるお姉さんにはわかんないかもしんないけど」

「リュウジさん、強いだけじゃなくて頭いい〜」

「リュウジさん、ここらじや一番ポケモン強いから」

「お姉さん、俺と勝負しようぜ。俺が勝ったらお姉さんにご飯おごってあげるよ」

「リュウジさん優しい。勝ってご飯奢ってあげるとか、男気ありまくりじゃないすか！」
盛り上がる男たちをよそに、アヴユールは少し怒った顔で言う。

「ごめんなさい！ 私、ポケモントレーナーじゃないんで！——行こう、モンジャラ」

そう言っただけで立ち去ろうとするアヴユールの腕の中から、リュウジに顎で指示された
ゴリキーがモンジャラを強引に引き抜く。小さな悲鳴を上げたアヴユールから引き
離され、モンジャラはかたいアスファルトの上に投げ飛ばされた。

「りいきー！」

「やめてくださいー！」

「いーからいーから。ポケモンは戦うもんだからさ。戦わせない方が可哀そうだって。
大丈夫大丈夫。じゃあ、ゴリキー。けたぐり！」

「りいきー！」

ゴリキーは宣戦布告のように叫ぶと走り出し、モンジャラの足元を力強く蹴って歩
道に転がした。

「もじゃー！」

転がったモンジャラはそのまま、見下ろすゴリーキーを見上げる。

そして突然、ぴゅぴゅぴゅつと小さな種をはなつた。

「……………りいきー?」

種を足元にぶつけられたゴリーキーはしばし固まった後、小ばかにするように笑い始めた。

「ははは。なんだ今の! お前ら見た!? 可愛いねえ、お姉さんのモンジャラ。何今の、
「タネマシンガン」? 「タネばくだん」? あんなちつちえータネ、見たことねえー
よ!」

「りいきー」

「モンジャラ……………」

アヴユールは男たちに馬鹿にされるモンジャラを見つめ、小さく呟いた。

「おら、ゴリーキー! もう一回^{いっかい}「けたぐり」!」

「りいきー!」

「もじゃー!」

起き上がったばかりのモンジャラは、再び足元を強く蹴られて転がされてしまう。

「おい、どうした? 反撃してこないの? さっきの攻撃馬鹿にされて、恥ずかしくって
攻撃できなくなっちゃった? ごめんね。——ゴリーキー! 先輩としてちゃんとお

手本見せてあげて！」

「……………りいきー！」

顔をしかめて不思議そうにしていたゴーリキーは、リュウジに言われて返事をする
と、無抵抗でひっくり返ったままのモンジャラにさらなる「けたぐり」を浴びせた。

「……………もじゃっ」

地面に転がっていたモンジャラが急に起き上がり、ゴーリキーをじつと見る。その
時、ツタの中から強い光りが漏れ出し始めた。

「りいきー?」

刹那、モンジャラのツタの中から強烈な光線が放たれ、ゴーリキーの全身を襲う。

「りいきー!」

ゴーリキーは鳴き声を上げ、倒れた。

「……………はっ? 嘘だろ? おい、ゴーリキー? ゴーリキー! 嘘だろおい。一撃つ
て……………!」

ゴーリキーに駆け寄ったリュウジは動揺し、膝をついてゴーリキーを見つめる。

「そんな……………。あのリュウジさんのゴーリキーが、一撃……………?」

男たちの間に動揺が広がる中、ケンタがハイパーボールを出しポケモンを出す。

「ぶーうーばー!」

「なんかの間違いだろ……。リュウジさんが負けるのなんて見たことねえよ。今度は俺の番だ！ あんだけリュウジさんのゴーストの攻撃食らってんだし、ほのおタイプなら負けるはずがねえ！」

「ちよつと、もうやめて！」

「うるせえ！ いけ、ブーバー！ ほのおのパンチ！」

「ぶーうーばー！」

ケンタの叫びにこたえ、〃ひふきポケモン〃ブーバーはモンジャラに向かっていくと、燃える拳でモンジャラを打ち抜いた。

「もじゃー！」

モンジャラは鳴き声を上げて吹っ飛ばされるが、瀕死になることなく起き上がった。
「嘘だろ……。効果抜群だぞ？ んなわけ……。！」

動揺するケンタの前で、モンジャラが身構える。

その時――。

「やめろ、ケンタ」

「リュウジさん……。！」

「俺たちの負けだ。これが負けじゃなかったらなにが負けだ!? ア!? クソっ！ これ以上、恥を上塗りすんじゃない！」

リュウジはゴーリキーをボールに戻すと、アヴユールを見た。

「……………わかるかったな。本当にあんた、ポケモントレーナーじゃないのか？」

「……………」

アヴユールが無言で頷く。

「そうか。——モンジヤラも、悪かった。つえーなお前……………」

「……………もじゃっ」

真っ直ぐにリュウジを見返すモンジヤラとしばし見つめ合ってから、リュウジはアヴユールの方に戻り財布を出す。

「これは侘びだ」

「えっ……………、いりません！」

「いいから受け取れ！ ポケモンバトルで負けたら賞金を払うのが俺らの流儀だ。侘び代も込みだが、受け取ってくれ」

「……………そんな、いりません」

「ちっ！」

リュウジは舌打ちするとモンジヤラの方に戻り、お金をその前に置いて下がった。

「……………悪かったな。——帰るぞ、お前ら！」

「あっ……………。はっ、はいっ！」

男たちが去った後、アヴェユールはすぐにモンジャラに駆け寄った。

「大丈夫、モンジャラ！」

「もじゃー！」

「すごいよモンジャラ！ モンジャラはやっぱり強いね！」

「もじゃー……………」

「待ってね。今すぐポケモンセンターに連れてってあげるから」

そう言つて電子端末を取り出し場所を調べようとするアヴェユールを、モンジャラは止めるように鳴いた。

「もじゃっ！ もじゃー！」

「大丈夫なの？ でも、いっぱい攻撃されたんだし、やっぱり行つた方が……………」

「もじゃっ！」

アヴェユールのリュックサックをツルで示し、モンジャラが鳴く。

「たしかに、一応『きずぐすり』は持つてるけど……………」

「もじゃっ！」

「……………うん、わかった。じゃあ先、串カツ食べに行く？ 時間もないし……………」

「もじゃー！」

「もう、モンジャラは……………。……………ありがとう」

「もじや?」

こうしてアヴェユールとモンジヤラは、煌^{きくら}びやかな夜の街に串カツを食べに消えていった。

2日目 | 午前中 | キキョウシティ

——ここは キキョウ シティ

なつかしい かおりのする まち——

ジョウトにやって来て二日目。

今日もアヴユールは昨日と同じ髪型だったが、八分袖の赤いシャツにデニムのオーバールを合わせたコーデに着替えていた。白い広めの襟の下で大胆に丸く空いている胸元を、黒いインナーシャツでしっかりとガードし、全体的に少女らしいかわいさをまとっている。シヨート丈のオーバールから伸びる綺麗な脚は、白いハイソックスで包みこまれており、口の部分の黒いラインが、アヴユールの綺麗な肌の色と共にアクセントを添えている。

アヴユールたちは今日、朝早くにコガネシティを出発し、すでに隣町のキキョウシティへとやってきていた。

「すごい。おっきいね!」

「もじゃー……」

池の前で立ち止まって顔を上げるアヴユールとモンジャラの目には、大きな塔が映っ

ている。

「この塔はね、とつても大きなマダツボミが柱になって出来たつて言われてるんだつて」

「もじゃー」

「ふふふ。ほんとかなあ？」

心なしかいたずらつぽく笑つたアヴユールは、抱きかかえたモンジヤラと一緒に写真を撮ると、目の前にかかる太鼓橋に足を踏み出した。

「面白い形の橋だね」

「もじゃー」

太鼓橋とは、太鼓の胴が真ん中に向かうにつれて膨らんでいるように、橋の中央が上に向かつて膨らんだアーチ状の橋のことをいう。『マダツボミのとう』の前にかかる太鼓橋は短く、落ち着いた色合いで派手さはないが、そこには侘^{わび}や寂^{さび}を感じることにきる奥行きがあつた。

アヴユールはその中ほどで立ち止まり、はし^{橋端}から池に目を向けた。

「……………」

モンジヤラも足を止め、低い視線を欄干の隙間から池へ落とす。

「……………」

不意にポツポポが一匹飛んできて、池のほとりの木にとまった。ポツポはまるで紙の上

に描かれた浮世絵のように動きをとめ、どこかを静かに眺めている。

「……………なんか、いいね」

「もじゃー……………」

ふと呟いたアヴユールに、モンジヤラが優しく返事を返す。

通行人が、アヴユールとモンジヤラにさして意識を向けることもなく通り過ぎていく。

とまることなく流れていく時の中で、今ここで、アヴユールとモンジヤラだけが立ち止まっていた。景色とポツポもとまっていた――。

「……………」

ポツポが不意に体を震わす。アヴユールの足元で、モンジヤラは音を立てることもなく呼吸をしている。水面は静かだが、目には映らない小さな変化を絶えず繰り返し、木々は葉を揺らすこともなく光合成をし、橋は永久にも近い速度で音もなく風化してゆく。アヴユールの心臓は、その華奢な体の中で、誰の目にとまることもなくどくんどくとゆっくり鼓動を刻んでいる。

「……………ぽぽーっ」

不意にポツポが鳴いて、飛び去った。

後には何も残さず、後には変わらない風景が残った。

「……行っちゃったね」

「もじゃー……」

ポツポの姿はもうどこにも見えないが、ポツポは確かにどこかにいるはずで、今もきつと生きているはずで。でもそれを、アヴュールたちは知る由もない。

「行こっか……」

「もじゃー」

二人は再び歩き出した。

*

——ここは マダツボミのとう

ポケモンの しゅぎようを なされよ——

「ねえ見て！ かわいい……！」

「もじゃー」

「マダツボミのとう」の入り口で、悶えんばかりに喜ぶアヴュールを見上げて、モンジャラが優しく微笑む。

そんなアヴュールたちの前には、マダツボミの像が立っていた。

塔の入り口の両脇には、一体ずつマダツボミの像が建てられている。力強いタッチで彫られたマダツボミの像は、その作風とは裏腹に、マダツボミらしい何とも言えないゆ

るーい表情をしている。

「あつ、ねえ見てモンジヤラ！ 柱が揺れてるよ！」

「もじゃー」

思わず抑えた声をほとばしらせるアヴユールの目の前では、塔の真ん中に立つ太い大きな柱がぐわぐわぐわぐわと揺れていた。

「外からじゃ全然わかんなかったね」

「もじゃー」

マダツボミの細い胴体のようにうねる極太の柱に、アヴユールとモンジヤラは見とれてしまう。

「マダツボミのとうがはね、すつごーく昔に、ポケモン修行のために建てられたんだつて。でもね、今まで一度も、地震とか台風で倒れたことがないらしいの」

「もじゃー」

「地震とか台風がきても、建物が上手く揺れて振動を逃がしてくれるから倒れないんだつて」

「もじゃー……………」

「すごいよね。そんな昔に、そんな技術があつたなんて……………」

「もじゃー……………」

しばし柱を眺めた後、アヴユールたちは塔の一階を見て回る。

「今揺れてるのは、上でお坊さんたちが修行してるかららしいよ」

「もじゃー」

「こんなにおつきな柱がこんなに揺れるなんて、どんな修行してるんだろうね……」

「もじゃー……」

一階をじっくり見て回ったアヴユールたちは、最後に二階へと続く階段を前にして立ち止まった。

「ここから上は、野生のポケモンも出るみたいだし、お坊さんたちとの修行もあるらしいし、私たちはやめとこっか」

「もじゃー……」

アヴユールたちは少し残念な気持ちをお土産に、引き返す。

「最上階にはね、マダツボミの絵が飾ってあるんだって」

「もじゃー……」

「実物は無理だけど、後でじっくりネットで見ようね」

「もじゃー！」

少しお腹が空いてきたアヴユールたちは、ゆらゆら揺れる“マダツボミの塔”を後にした。

2日目 | 昼下がり | エンジュシテイ

——ここは エンジュ シテイ

むかしと いまが

どうじに ながれる れきしの まち——

「おつきーねー……」

「もじゃー……」

小さな池の前に立って、アヴユールとモンジャラは、目の前の木々の奥にそびえる高い塔を眺めていた。

「『スズのとう』は、とつても神聖な塔だから、エンジュのジムバツジを持ってないと入れないんだって」

「もじゃー……」

「近くで見てみたかったねえ……」

「もじゃー……」

しみじみと目の前の塔を見上げていたアヴユールたちの前に、目の前で紅葉している木々から落ちたのであろう、オレンジ色の葉が水面みなもを滑るように漂って流れてきた。ア

ヴールたちの視線も池に落ちる。

水面には、色鮮やかに彩られた木々と高い高い「スズのとう」が映っている。こんなにも近くにあるのに、手を伸ばしても触れることすら叶わない。まるで鏡花水月のよう
な「スズのとう」。

「ねえ、モンジャラ」

「もじゃー?」

「エンジュジムに挑戦してみる? モンジャラなら、ひよつとしたら勝てるかも……
!」

「もじゃっ!?!」

「昨日も、私にからんできた男の子たちのポケモン、あつという間にやつつけちゃった
し」

「もじゃー! もじゃもじゃー!」

「ふふふ。冗談だよ。もー……、モンジャラは真面目なんだからあ」

「もじゃー」

「ふふっ」

「アヴールは辺りに漂う空気のように軽やかに笑うと、その視線を再び前へと向けた。」

「……ありがとね、モンジャラ」

「もじゃー?」

真つ直ぐに前を見つめてつぶやいたアヴユールが、どこを見ているのか、モンジャラにはわからない。モンジャラは、不思議そうな目でアヴユールの横顔を見上げる。

「さあ、写真撮ったら歌舞練場かぶれんじょうに行こう!」

「もじゃー」

「舞妓まいこさん。踊りも上手だけど、ポケモンバトルも強いんだって」

「もじゃー」

「バトルしてみる?」

「もじゃー……」

「ふふふ。モンジャラはポケモンなのに、バトルは好きじゃないよね……?」

「もじゃー」

「いや、ほら。私はポケモントレーナーじゃないからさ。遠慮してるのかなー、とか思ったりもするんだけど……」

「もじゃつ! もじゃもじゃー!」

「ふふふ。そつか。モンジャラは優しいもんね」

「もじゃー。もじゃもじゃー」

「ふふ」

否定するモンジヤラを見つめてうれしそうに笑ったアヴユールは、すつと顔を上げて紅葉に視線を戻す。

「……紅葉、綺麗だねえ……」

「もじゃ？ ……もじゃあー」

急に話題を変えたアヴユールの視線を追いかけて、モンジヤラも池の奥に視線を向かわせる。

「私たちじゃ入れないけど、あの建物を通り抜けるとね。そこから、『すずのとう』まで続く短い道があるんだって」

「もじゃー」

「『すずねのこみち』って言うらしいんだけど、紅葉がとーっても綺麗らしいの」

「もじゃー……」

「写真がネットで見れるから、後でお茶しながら一緒に見よ？」

「もじゃー」

モンジヤラの返事に微笑みを返し、アヴユールは電子端末を取り出す。

インターネットを使えば、手の平の中に映し出せるのに、決して手に入ることのない遠い景色の写真を見るため、ではなくて。

確かに二人で、全身で感じている今を切り抜くために――。
また一つ、思い出の一ページを彩る写真が増えていく。
それは、ポケットに入るほどの、君との景色。

2日目 | 夕方 | エンジュシテイ

——やけた　とう

なぞの　おおかじで　やけました

きけんなので　ちかよらないでください——

「……………」

アヴェユールはふと、意識を引っぱられて吸いよせられるようにふらつと、エンジュシテイの北西を訪れた。

「……………」

無言で立つアヴェユールの眼前には、焼け落ちた塔が建っている。

モンジヤラもアヴェユールの足元に立つて、ボロボロの建物を見つめる。

「すごい……………ね……………」

「もじゃあ……………」

塔が火事によって焼けたのはもうずっと昔のことのはずなのに、黒く焼け焦げた壁や柱の残骸を見ていると、微かに灰の臭いが鼻を突くような気がした。それほどに、
「やけたとう」はそのままの姿でそこに残されていた。

「……元々はね。 “スズのとう” と対で、 “カネのとう” って呼ばれる塔が建つてたんだって」

「もじやあ……」

「でもね。雷が落ちて、大火事になって、そのまま焼けちゃったんだって……」

「もじやあ……」

「アヴェールの頭に、今日の昼間見た “スズのとう” や “マダツボミのとう” が浮かぶ。」

「“カネのとう” も、 “スズのとう” とか “マダツボミのとう” みたいに、地震とか揺れには強かったはずなのにね……。木造だから、火事で燃えちゃうんだね……」

「もじやあ……」

夕日を浴びて、燃えているように色づく “やけたとう” 。

ふと東の方を見上げれば、そこには今も確かに残っている立派な “スズのとう” が建っている。どちらも夕日に照らされているのに、その印象は全く異なる。

「なんか、さみしいね……」

「もじやあ……」

モンジャラが、隣に立つアヴェールの横顔を見上げる。

その顔もまた夕焼けに染まって、いつもとはどこか違う表情になっていた。

「ふふ。ごめんね。なんかちよつぱり感傷的な気分になっちゃった」
「もじゃー!」

「ふふふ。ほら、昔の人が建てた古い建物を見ながら、色んなことを考えてたらさ。なんだかちよつと、切ない気分になっちゃったの」

そう言うのと、アヴユールはモンジャラを優しく抱き上げる。すこしくすぐったいツタの感触が、手のひらに優しく響く。

「モンジャラ。昨日も今日も、いーっぱい歩いたね」

「もじゃー」

「楽しかった?」

「もじゃー」

「ふふふ。よかった」

「もじゃー?」

「え? 私? 私もちろん、楽しかったよ」

「もじゃー」

「ふふふ。じゃあ、ご飯食べに行こつか」

「もじゃー」

緩めた腕の中から勢いよく飛び出したモンジャラは、地面に着地するとアヴユールを

振り返る。

アヴユールは幸せそうに笑い、歩き出した。

夕焼けに染められた“やけたとう”を背にして、アヴユールとモンジャラは、次の一瞬に向かつて一歩一歩、進んでいく。

終わりに向かつて、ゆっくりと、歩を進めていく。

2日目 深夜 しぜんこうえん



——いこいの ひろば

しぜん こうえん——

深夜一時半を回った頃。

人気のない公園の南側にあるベンチに座って、アヴェユールはモンジャラと一緒に夜風ひとけに当たっていた。

「ねえ、モンジャラ。明日には、帰らなくっちゃだね……」

「もじゃあ……」

アヴェユールとモンジャラの前では、鮮やかなピンク色の花たちが、夜の暗がりの中で時折りそよそよと揺れていた。彼女たちの座っているベンチは公園の角にあるベンチで、街灯の明かりはあまりやってこない。

秋の夜長が、刻一刻と過ぎていく。

「ねえ。もうちよつとだけいよう……」

「もじゃあ……」

アヴェユールのはいているハイソックスでは隠しきれない慎ましやかな太ももの上で、

モンジヤラは穏やかに返事をする。

「……………あつ、ちよつと。モンジヤラ、くすぐつたいよお」

「もじやつ！ もじやあー」

モンジヤラがアヴェールを振り向き、申し訳なきように鳴く。

「ふふ、大丈夫」

そう言つて微笑むアヴェールの顔を見て、モンジヤラは再び花壇の方へと顔を向ける。

「……………んっ」

モンジヤラの頭をなでながら、アヴェールはモンジヤラが気にしないように抑えつつ、くすぐつたさで小さく声を漏らした。

モンジヤラの全身をおおうブルーのツルには、細かな毛が生えている。だから、ツルに触れると少しくすぐつたいのである。

アヴェールはもう何年もモンジヤラと一緒にいるため、ある程度は慣れていたが、それでもやつぱり裸の太ももにモンジヤラを乗せていると、ちよつぴりくすぐつたさに身をよじりたくなることもあるのだ。

「ねえ、モンジヤラ。ずつと、こうしてたいね……………」

「……………もじやあ」

「でもさ。私ももうそろそろ、彼氏とか、できてもいい歳だよね」

「……………もじゃあ……………」

「私に彼氏ができたら、こうやってモンジャラと二人つきりで過ごす時間も、きつと減っちゃうね……………」

「……………」

「もしかしたら、こうやって二人だけで旅行に来るのも、これが最後かもしれない……………」

「……………もじゃ……………」

静かな沈黙が流れる。遠くで微かに虫ポケモンの鳴き声があったような、しないような。心地よく体をなでていく風が運ぶ、夜空の雲のような、ゆっくりとした時間がながれてゆくようだった。

「……………ふふ、ふ」

「……………」

「ふふふ。ねえ、モンジャラ。嫉妬した？」

「……………もじゃあ」

弱々しく鳴くモンジャラの後頭部に、アヴユールはイタズラっぽい笑みを向ける。

「さみしくなっちゃった？ ごめんね、モンジャラ。冗談だよ。もうしばらく、彼氏はい

らないかなあ。私には、モンジャラがいるし」

「……………もじゃあ」

遠慮がちなモンジャラの鳴き声に、アヴユールは微笑む。

「大丈夫だよ。私がモテるの知ってるでしょー。でも、みんな顔でよってくるような男
ばっかで、いい人なんてそうそういないからさ。ゆっくり探すの……………」

「もじゃあ……………」

「……………私。顔以外。魅力、ないのかなあ……………」

さびしそうに小さく呟いたアヴユールを、モンジャラはパツと振り向いた。

「もじゃっ!」

「……………ふふ」

目を丸くしたアヴユールの唇から、笑い声が零れる。

「ありがとう。大丈夫。……………でもさ、なかなか言えないじゃん。こんなこと。自慢つ
ぼくてさ。嫌味みたいで。そりゃ、かわいって言われてうれしくないわけないけど、
みんな見た目ばかり褒めるんだもん。ちよつと。ちよつとだけ、悲しくなるよね
……………」

「……………」

「……………」

「メイクだつてしてるし。そりゃあお洒落も多少は気を使ってるし。……………でも、だか

ら。わがまま言うときゃあ。そういう見た目だけ褒められても、ちよつと、さみしいよね
……」

「……………」

「？」

突然、アヴェールの膝からモンジャラが飛び降りる。驚くアヴェールから少し離れた
モンジャラは、舗装された公園の地面の上で彼女の方を向き直り、体をおおうツタを伸
ばして激しく揺すった。全身をおおうツタをアピールするように、モンジャラはツタを
伸ばして揺すって鳴いた。

「…………ふつ、ふつ。それ、着飾ってるの。モンジャラ、そのツタ、着飾ってるの。ふ
ふ、ふふふふ。それじゃあ私とおそろいだね」

「もじゃ〜」

「ふふふ。モンジャラとおそろいかあー。それならうれしいかなあ」

「もじゃあ〜。もじゃー!」

可笑しそうに笑うアヴェールの笑顔を見て、モンジャラはうれしそうに鳴いた。ツタ
の間からのぞくモンジャラの目も、笑っている。

「はあー、おかしい。…………モンジャラのそういうところ。優しいところ。モンジャラ
の中身が、私、大好き」

「もじやあく。もじやー、もじやー」

「ありがとう。……さあ、おいで」

「もじやあく」

アヴェールはベンチに座ったまま身を乗り出し、両手を出す。そこへモンジヤラが
ちよこちよここと駆けてくる。

「よいしよ」

再び膝の上に乗ったモンジヤラは、また静かにアヴェールと花壇を眺める。

「……ありがとうね、モンジヤラ」

「……」

風が二人をなでる。アヴェールがモンジヤラをなでる。時が、そこかしこをなでて進
んでゆく――。

3日目 朝 コガネシティ

——またの

ごりようを おまち してます！——

「んー……」

枕元の電子端末から大音量で流れ出した音楽で、眠っていたアヴユールは目を覚ます。

布団からガバツと飛び出した細い腕が、一直線に枕元へ向かい、端末の画面に触れてアラームを解除しようとした正にその瞬間^{とき}。横から伸びてきたブルーのツタがひよいつつ端末を取り上げる。

「……あつ。ねえ、モンジャラあゝ……。返してえー。止めてえゝ」

「もじゃー！」

ゆらゆらと宙に揺れる端末から流れる音楽は鳴りやまない。

「もー、わかっただからあ。起きるから止めてえ」

「……もじゃ」

モンジャラは枕元に端末を戻すと、ツタで画面に触れアラームを解除する。

「今何時ー? ……もう九時半? まだ眠いのにく。起きなきやー」

そう言つてゆつくりと起き上がったアヴユールの体から、ずるつと布団がずり落ちる。

「もじゃっ!」

慌てて目をそらすモンジャラの前で、眠そうに目をこするアヴユールの体は、かわいらしいパステルカラーの下着しかまとつていなかった。白いレースの装飾がかわいい、あわいブルーの下着がつくる、ひかえめによせられたふくらみの隙間。

「昨日そのまま寝ちゃったもんねー」

そう言つたとアヴユールは、背中を向けているモンジャラを抱きよせ、もう一度ごろんと横になる。

「もじゃあ〜!」

慎ましやかで綺麗な形のふくらみを顔に押しつけられて、モンジャラが鳴き声をあげる。その振動が胸に伝わり、アヴユールはイタズラっぽい笑みを浮かべる。

「ねえ、モンジャラ。朝からしちやう?」

「もじゃあ!」

「ふふ、そうだね。今日で帰らなくちゃだし、帰つてもいっぱいできるもんね。時間通りチエックアウトして、ちゃんと観光して帰ろ」

解放されたモンジヤラは一目散にアヴユールの胸元を飛び出し、ベッドを下りて逃げていく。

「もじゃっー！」

少し怒ったように鳴いて、モンジヤラはアヴユールの方を見ない。もちろんそれは怒っているからではなく、アヴユールの下着姿を見ないためだが。

——あれ？——

ベッドを出たアヴユールはふと、寒くないことを不思議に思う。

暖房をつけっぱなしで寝るとノドが乾燥して痛くなってしまうので、タイマーをセットして寝たはずなのに、下着姿でも全然寒くない。

暖房がついている。でも、ノドは痛くない。まるで、アヴユールが目を覚ますタイミングで部屋が温まっているように、時間を見計らってつけたかのようなちよいどいい温度と湿度だ。

「……………」

ツルを器用に動かして荷物をまとめるモンジヤラの背中を見ながら、アヴユールは微笑んだ。

3日目 | 午前中 | しぜんこうえん

——きょうは どようび

むしとりたいかいが ひらかれます！——

「ストライク、全然いないねえ……」

「もじゃあ……」

出発予定時刻ギリギリでチェックアウトを済ませたアヴェユールたちは今、〃しぜんこうえん〃で〃むしとりたいかい〃に参加していた。

ルールは簡単。手持ちのポケモン一匹で、大会専用のボールだけを使い、誰が一番強い虫ポケモンを捕まえられるか競うというものである。

火曜日、木曜日、土曜日の週三回しか行われぬこの大会に参加するために、アヴェユールは今回の旅行の日程を調整していた。虫ポケモンはあまり得意ではないアヴェユールだったが、せつかくなので旅の記念に、何かモンジャラと挑戦してみたかったのである。

——絶対優勝しようね！——

元気よくそう意気込んでいたアヴェユールだったが、今は心なしか弱気な表情で、〃かまきりポケモン〃 ストライクを探している。

「もじゃー!」

突然モンジャラが鳴き声を上げ、背の高い草むらから飛び出してきた緑色のポケモンをツタで示した。

「! モンジャラ。それは、トランセルだよ……」

「もじゃー……」

目の前でかたくなるトランセルを見逃し、モンジャラと一緒に草むらを歩き回るアヴュール。

そんな彼女の今日のコーデは、くすんだパステルパープルのニットカーディガンに、襟元がかわいい真っ白なシャツを合わせ、少しだぼつとしたジーパンで脚を包んだオリジナリティーのあるものだった。

「やつぱり、ストライクにはそう会えないのかなあ……」

「もじゃー」

「この公園にいる虫ポケモンで、一番強そうなのはストライクだと思うんだけど……」
そう言いながら、アヴュールは首から下げた電子端末で時間を確認する。

残り時間はもうそんなくない。

「うーん……。そろそろ、とりあえず何か一匹捕まえておこつか。何も捕まえられないまま終わっちゃったら最悪だし……」

「もじゃー」

「うーん……、えい！」

アヴユールはそう言うのと、勢いよく手を振るって草をかき分けた。

「すーぴああー！」

「きやつ！」

アヴユールがかき分けた草むらから、突然 “どくばちポケモン” のスピアーが飛び出してきた。

「すーぴああつ!!」

気合を溜めるように鳴き構えるスピアーに、アヴユールはあわててボールを投げる。二十個しか貰えない、この大会専用のボールだ。

ボールは見事にスピアーに命中し、地面に落下するとぐらつと揺れて、

「……」

——勢いよくスピアーを吐き出した。

「すーぴああ!!」

「ああー！ 捕まえたと思ったのに！」

「すーぴああ!!」

再び自由になったスピアーは、素早く空中を駆け、あつという間にアヴユールに迫る。

「きゃつー！」

「もじやー！」

間一髪。スピアーの両腕についたハリの一撃をモンジャラが受け止め、アヴユールは事なきを得る。

「すーびああ！ すーびああつー！」

スピアーのハリの乱舞を、モンジャラは必死で受け止める。

「モンジャラー！」

「もじやー！」

目の前のスピアーをしつかり視界に収めながら、力強く返事をするモンジャラに、アヴユールはうなずく。

「ありがとう！ 今度こそ……！」

アヴユールがもう一度ボールを投げ、目の前のモンジャラに夢中なスピアーを容易く射止めた。

「お願い……、捕まって……！」

祈るように両手を合わせるアヴユールの前で、ボールがぐらり、ぐらりと揺れ、

「……」

——またもスピアーを吐き出した。

「すーびああ!!」

再びスピアーの“みだれづき”がモンジャラを襲う。

「モンジャラ!」

「もじゃあ! もじゃあ!」

大丈夫だと言うように、力強く鳴くモンジャラに元気づけられ、アヴユールはもう一度ボールを投げる。

「今度こそ! お願ひ!」

ボールはスピアーを吸い込むようにその中に収め、地面に落ち、三度目の正直、

「……」

——とはならなかった。

「すーびああ!」

「だめだ。全然捕まらない……」

一度も揺れないボールから飛び出したスピアーを見つめ、アヴユールは早くも取り出したボールを力強く握りしめる。

「すーびああ!」

スピアーが、そんなアヴユールと無抵抗で攻撃を受け続けるモンジャラをあざ笑うように“きあいだめ”をして見せる。

——この大会では、捕まえたポケモンが弱つてない方が、貰えるポイントも高いんだつて。ネットの噂だからほんとかどうかはわかんないけど、できれば戦わずに捕まえたかね！——。

モンジャラは、先ほどアヴユールがそう言ったのを覚えていて、あえて一度も反撃せずに攻撃を受け続けていた。

「……ありがとう、モンジャラ！」

アヴユールはそう呟くと、力を込めてボールを投げた。

力んだ投球は少しカーブをえがき、油断していたスピアーの重心を捉えた。

「お願い……！」

「もじゃっ……！」

二人の祈りが重なる前で、ぐらり、ぐらりとボールが揺れて、

「……！」

——カチリと小さな音を響かせると、ピタリと動かなくなつた。

「……やったー！」

「もじゃー！」

「捕まったよ！　ねえ、捕まえたよ！　モンジャラ！」

「もじゃー！」

「やったね? やったね! モンジャラ!」

「もじや〜! もじや〜!」

「ふふ、ふふふ……。うれしいね?」

「もじや〜!」

ひとしきり喜んだあと、アヴユールはボールに向かって駆けていく。

ととととその後ろをついてくるモンジャラを振り返り、「やったね」とにつこり微笑んだアヴユールの目が、突然それで硬直する。

「もじや〜?」

アヴユールの視線の先を追って振り返ったモンジャラも、驚いて目を丸くする。

「……………すううとらいく!」

「ストライク!」

「もじや〜!」

慌ててスピアーの入ったボールをカーディガンの飾りみたいなポケットに押し込み、アヴユールは新しいボールを取り出す。

そんな彼女のウエスト辺りから、小さなポケットに上手く入らなかったスピアー入りのボールがぼろつと落ち、それに奪われたアヴユールの意識ごと拾い上げるようにモンジャラのツタがボールをキャッチする。

「ありがとう、モンジャラ！」

そう言つてすぐにストライクに意識を戻し、アヴユールがボールを投げたのと、大会終了のアナウンスが流れたのはほぼ同時だった。

「ピンポーン！ 時間がきました！」

自分に向かつて投げられたボールを堂々と受け止めたストライクは、一度の揺れも許さずボールを飛び出すと、何事もなかったかのように澄んだ翅をはためかせて飛び去つていった。

*

「結果発表ー!! じゃじゃじゃーん!!」

「しぜんこうえん」のゲートで、職員が声を張り上げる。

「モンジャラ……」

「もじゃー……」

職員を真つ直ぐに見つめてつぶやいたアヴユールを見上げ、モンジャラが優しく勇気づけるように鳴く。

いよいよ大会の結果発表だ。

「三番はストライクを捕まえたエリートトレーナーのケンさん。得点は三三三点でした！」

「三位でもうストライク……」

不安そうにアヴユールが呟く。

しかし、その表情からは負けず嫌いの希望がまだ消えていない。

「二番はキャタピーを捕まえた、ピクニックガールのカオリさん。得点は三三五点でした！」

「……キャタピーで?!」

「もじゃあ……」

アヴユールたちと共にざわつく会場内で、職員がひととき大きく声を張り上げる。

「そして！ 今回の大会、一番の優勝者は……」

「……」

「……」

アヴユールとモンジヤラが固唾をのんで次の言葉を待つ中、職員がその結果を発表する。

「スピーアを捕まえたアヴユールさん！ 得点は三三六点でした！」

「……うそ」

アヴユールの瞳が大きく開いてゆらつとゆれた。

「もじゃー！」

うれしそうに鳴いてアヴュールを見上げるモンジャラに、かたまっていたアヴュールが微笑みかける。

「やったね！ モンジャラ、やったよ！」

喜ぶ二人は笑顔の職員に呼ばれ、他の入賞者たちと共に前に出て商品を受け取る。

「—— 一番のアヴュールさんには、＼たいようのいし＼をさしあげます」

「ありがとうございます！ —— やったね、モンジャラ！」

「もじゃ〜！」

うれしそうに、＼たいようのいし＼を握りしめるアヴュールと、それをやっぱりうれしそうに見上げるモンジャラ。

「次の大会も頑張ってくださいね」

公園の職員はそう言つて大会を締めくくつた。

*

大会が終わつて——。

「やったね、モンジャラ」

「もじゃー」

二人は、＼しぜんこうえん＼のベンチに座つて一休みしていた。

「だいじょうぶ？ スピアーの攻撃、たくさん受けちゃつて。痛かつたよね……？」

「もじゃー!」

元気に返事をするモンジャラに、アヴユールはリュックサックから取り出した「キズぐすり」を使って優しく手当てをする。

「私ね、モンジャラと絶対優勝したかったんだ」

「もじゃあ」

「モンジャラと参加したら、きつとそれだけですつごく楽しいだろうなって思ったけど……。本当に、それだけですつごくすつごく楽しかったけど……。でもね。だからこそ、絶対に優勝したかったの」

「もじゃー!……」

「ふふふ。なーんてね。はい、おしまい」

アヴユールは幸せそうに笑うと、モンジャラの手当てを終えて道具を片付けた。

そして、リュックサックにしまつてあつた「たいようのいし」を大事そうに取り出して、モンジャラと一緒に眺める。

「すごいね……」

「もじゃあ……」

「帰ったら、どこかで加工して貰って、アクセサリーにして貰おう?」

「もじゃー!」

「髪飾りみたいにして、モンジャラのツタに付けよっか？　このへん。どーお？」
「もじゃー……。もじゃっ！」

モンジャラはそう鳴くと、ツタで「たいようのいし」の真ん中をつーとなぞった。

「えっ。半分こにするの？」

「もじゃっ！」

「えー、もったいないよお……」

「もじゃー……」

残念そうに鳴くモンジャラを見て、
「たいようのいし」を見て、アヴェールはしみじみと言った。

「……でも、そうだね。二人で大会に参加して、優勝して、貰った石だもんね。半分こにして、おそろいでつけよっか？」

「もじゃあ〜！」

「ふふふ……」

アヴェールは微笑むと、大事そうに「たいようのいし」をリュックに戻し、立ち上がった。

「じゃあ、そろそろ行こっか」

「もじゃー！」

モンジャラもぴよんとベンチから地面に降りる。

あたたかなお昼の日差しの下を、二人はゆっくりと歩き出す。

それぞれの一步、それぞれの時間を重ねて。おそろいの思い入れ、おそろいの思い出が、また一つ。

3日目 夜 41ばんすいどう？

——ここは アサギ みなと

こうそくせん のりば ——

「……………」

決して広くはない格安の客室で、ベッドに腰を下ろし、アヴユールは静かに壁の方へ視線を落としていた。

しばらく前に「アサギみなと」を出発したこの船は、今頃「うずまきじま」と「コガネシティ」の間を南下している頃合いだろうか。膝の上にモンジャラを乗せたアヴユールは、窓のない壁の先に真っ暗な海を望むように座っていた。

「もうしばらくしたら、ジヨウトともお別れだね」

「もじゃあ……………」

細長い部屋の中を、しみじみとした空気が満たしている。

「……………」

「……………」

モンジャラもアヴユールも、喋らなかつた。

特に何か、理由があるわけではなかったけれど。ただ、なんとなく、二人は黙っていた。

旅の余韻にひたるように、旅の終わりの寂しさにひたるように。ただ、二人は静かに前を向いて座っていた。

「……ねえ、モンジャラ。楽しかった？」

「もじゃー！」

「ふふ。よかった……」

うれしそうに微笑んだアヴュールを、膝の上でモンジャラが振り返る。

「もじゃー？」

「うん。私も楽しかった」

「もじゃー！」

二人はなにげない言葉をかわして、なにげない幸せをかさねて、なにげなく微笑み合った。

「……お風呂、行こっか」

「もじゃー！」

アヴュールに優しく頭をぽんとされたモンジャラは、膝の上からぴよんと飛び降りる。

「帰りもオーシャンビューらしいよ？ あっ！ コガネの夜景、見れるかな？」

「もじゃー」

お風呂セツトを準備するアヴェユールの手が急ぎ出す。

「せっかくだし、見たいよね。急がなきゃ……」

「もじゃー」

焦るアヴェユールをなだめるように、モンジャラが優しく鳴いた。

「うん、大丈夫。行こう」

「もじゃー！」

アヴェユールとモンジャラは客室を出て、大浴場へと向かった。

残りわずかなジョウト旅行を、まだまだ楽しむために。

——人とポケモンが二人、旅してる。

——船の窓から星が見える……。

T H E E N D

あとがき

読んで下さった方、ありがとうございます。
不快にしてみました方、申し訳ございません。

私が観測して、素敵だなあと思い、文章という形に起こさせて頂いた「アヴユールとモンジャラの旅行」の断片を。みなさんにも楽しんで頂けていたなら、うれしいなと思います。

改めまして――。

読んで下さった方、ありがとうございます。

不快にしてみました方、申し訳ございません。

皆様の人生が幸せなものでありますように――。